

美術とスポーツ

太田 圭

Fine Arts and Sport

Kei Ota

おはようございます。只今ご紹介いただきました太田です。私の専門は日本画制作です。日本画は美術における油絵とか彫刻などと同じく表現の一つですけれども、日本画とスポーツは直接的に関わりがあるわけではないので、この講義を承るに際しまして私はいろいろ悩んだり迷ったりするところがあったのですが、私が「スポーツをする人」をモデルにした「人の動きとその表現」をテーマに描いていますので、その点で皆さんの参考になればと思っていますところ です。

きょうは配付した資料を基にして、私の作品や歴史上残されてきたスポーツに関わりの深いと思われる作品をスライドで紹介しながら、美術とスポーツの関係を考察してみたいと思います。

さて、私はスポーツは好きですが専門家ではありませんので、取り留めのない講義にならないかと不安ですけれども、少しでも流れを把握していただけるようにと、資料にキーワードを並べてみました。

早速見ていただきたいのですが、テーマ1と2があります。テーマ1は「美術におけるスポーツ～再現と表現について」です。私は日本画という「かたち」を残すところにお

ますので、これがメインテーマとして悩む部分です。この「再現と表現」をこの授業の縦糸として、これから紹介する具体例を見ていただきたいと思います。

続いて2番目のテーマの「オリンピックと芸術」。今年はオリンピック・イヤーということで、この講義でも触れたいと思います。

それから資料の右下に図1と図2があります。これは皆さんもご存じだと思いますが、相撲の「土俵の房色」と明日香の「高松塚古墳」です。最近「キトラ古墳」が再調査され、壁画と星宿図が話題になりました。古墳の中の東西南北の壁面には獣神が描かれています（注、高松塚古墳の南壁は盗掘による損傷のために未確認）。さらに四方四色といわれているように、色彩も方角によって規定されているのです。これが皆さんもテレビで観たり実際に観に行ったこともあるかと思いますが、大相撲に非常に関係があるわけです。古墳も大相撲も時間がありましたら触れたいと思いますが、きょうは主に「再現と表現」と「オリンピックと芸術」ということになるかと思っています。

それでは大枠から進めたいと思います。

資料の左上に抜粋したのですが、皆さんに「スポーツをテーマにした芸術で思いつく作品は」と尋ねたら、いろいろなものを

*芸術学系

答えて下さると思うんです。そのなかでおそらく多くの方が最初にイメージするのは彫刻かもしれません。そして、この『円盤投げ』を答えるのではないかと思います。この作品については、三島由紀夫が1967年に「芸術新潮」という美術雑誌の「青年像の傑作を選ぶ」という特集に、次のような文章を書いています。

「この有名な傑作については、今更喋々するまでもあるまい。円盤投げの準備運動そのままの写実のようだが、これほど青年の闘志が優雅に表現されたことはなかった。ゆたかな自信にあふれ、完璧なフォームを描きながら、眼も四肢もすべてが自分の投げようとする円盤に集中しているさまは、青年の闘志が自己放棄と結びついているときに最も美しいということを暗示している。この青年に、かくも優雅で美しい姿勢をとらせているものは、思想でもなければ夢でもない。一個の手ごたえのある円盤なのだ。この世界の中で、一個の目的ある円盤と、みごとな肉体とを、二つながら所有している青年の幸福は完全である。そしてその幸福のなかに静かに漲っている闘志が、この世界で最も幸福な青年を、世界で最も青年らしい青年にしているのである。」

そこで三島は、闘志・勝利・苦悩・理知・悲壮・安逸・英雄・憂鬱などの「青年期の8特性」について、それぞれに相応しいと考えた8作品を選びました。その中の「闘志」というところに『円盤投げ』を取り上げています。この像は模刻像でミュロンという彫刻家が模刻したので、名前とともに『ミュロンの円盤投げ』とも呼ばれています。このように文学の作家が非常に興味を持って芸術を覗いていたのです。(原作は紀元前450年頃の制作)

さて①の「芸術のスポーツへの関心、あるいはスポーツと関わる美術」から、皆さんは古代ギリシャの壺絵(陶器画)を思い浮かべられるかも知れません。壺には古代の神事や

スポーツ、日常生活などが描かれています。

その次に「未来派前後 ポッチョーニ」とあります。これは20世紀初頭の1909年にイタリアで興った美術運動があったのですが、美術史の中でもルネッサンスや印象派などと比べると注目度が低いようです。ところが私が共感するような「動き」をダイナミックに捉えた表現があるのです。その代表的な作家がイタリア人のウンベルト・ボッチョーニ(1882～1916)です。

それから、動きのフォルムを色彩で抽象的に表現したニコラ・ド・スタール(1914～1955)というロシア生まれのフランスの画家がいましたので紹介します。

日本に眼を向けてみますと、スポーツではありませんけれども、「人や動物の動き」としては、装飾古墳壁画や正確には渡来のものですが正倉院宝物の基盤などの工芸品にも見受けられます。そして何より見落としてはならないのは数々の「絵巻」です。たとえば、『鳥獣戯画』という、人間社会の諸相をサルやウサギ、カエルなどの動物に置き換えて、漫画風に描いたものがあるのですが、その中には相撲をとるカエルや、泳いでいるとも溺れているとも見える、水に浮かんでいるサルが描かれています。広く捉えれば、日本や東洋にも古くから「動き」を描いたものが多々見られます。

それから彫刻ですが、ドガ(1834～1917)の、ダンサーやバレリーナの一瞬の動きを捉えた彫刻作品もよく知られています。未来派の彫刻作品も紹介します。

日本人の彫刻家では石井鶴三(1887～1973)が相撲に大変興味を持っていて、美校(現在の東京芸大)在学中から相撲をとり始め、所属する春陽会の仲間と40歳過ぎてても相撲をとっていたようです。さらに「彫刻と相撲」というエッセーでも「彫刻は塊の芸術である。彫刻的に見れば、力士は一つの塊りである」ので、「相撲を愛好する我々としては、相撲を

絵画彫刻の題材として取り入れることになるのは、自然の勢いである」と綴っています。付け加えれば、石井鶴三は横綱審議委員会委員にもなりました。

次の文芸・文学は美術とは離れますが、正岡子規・水原秋桜子・山口誓子・佐々木幸綱らは野球・ラグビー・スケート・スキーなどのスポーツを詠んでいます。特に正岡子規には野球を題材とした「ベースボール9首」という短歌がありまして、齋藤茂吉が絶賛したそうです。それから「俳句甲子園」とありますが、これは昨年からはまったコンクール形式の俳句の催し物で、高校野球の甲子園大会に因み、「甲子園」を特別に季語に設定して募集をしたものです。余談ですが私の句も入選しました。

さて、皆さんの中で『オリンポスの果実』という小説を読んだ方いらっしゃいますか。これは田中英光（1913～1949）が書いた小説です。この人は自らが早稲田大学在学中にボートの選手として1932年の第10回ロサンゼルス・オリンピックに出場しました。その彼が船で一緒だった女子選手に恋をしたのですが、この小説では最初から最後まで恋の告白や思い出について延々と綴っている私小説です。相手の女性も同じく学生選手で、走り高跳びに出場して9位に入賞しているのです。田中英光は太宰治から非常に褒められて、親愛の情を持っていました。そして文学の方でもいろいろ発表していました。ところが太宰の自殺に大変な衝撃を受け、太宰の墓前で後を追いました。それはともかくとして、当時のオリンピック遠征について垣間見ることができますので、同世代の皆さんにも興味を持って読んでいただけるものと思います。

再び芸術関係に戻りますが、その他では写真とかデザインがスポーツに関わりがあります。やはりスポーツというと「再現と表現」の問題が出てきます。見たままやそのままの動きだけでは物足りなさを感じる場合、特に

スピード感やダイナミックさを表現しようとすると何らかの工夫がいるわけです。その手助けの一つとして写真の発明というのが画家や彫刻家に対して影響を与えてきたのです。今回はエドワード・マイブリッジ（1830～1904）という写真家を紹介しますが、彼の撮影した人や動物の動きの連続写真は、1900年代初めのデュシャンやペーコンなどの画家やロダンなどの彫刻家に影響を与えたわけです。きょうはそれ以外の画家になりますが、写真から非常にヒントを得て描いた作品がありますので、これもお見せしたいと思います。

それからデザインの方ですが、スポーツの大会そのものも数多くありますので、ポスターから、ユニフォームのデザインやサポーターのグッズなどまで、かなり広範囲に関わりがあると思います。またコマーシャルに登場することも多いですね。イラストレーションなども含めて紹介したいと思います。

その下に「意味を込める（勝ち色等）」とありますね。今度のシドニーオリンピックの日本選手団のユニフォームのデザイン発表の席で、長野オリンピックでの活躍を引き継ぐ意味もあって、長野で使用した「勝ち色」を引き続いて使用する旨の発表がありました。この「勝ち色」は紺色のさらに濃く暗い藍染の色で、本来はこれを「褐色（かちいろ）」といい、「勝ち」につながるとして、鎌倉時代の武士の間で非常に流行した色です。ハイテクの現代でもその色の縁起を担いで使用したということですが。

実は私は本学の蹴球部のOB会会員証のデザインを頼まれたときに、ひと足早くこの「勝ち色」を使用しました。実際の印刷では紫がかった色になり、かえって高貴な印象のカードになりましたが、このように意味を込めて色を選ぶことがあります。

東京大会・長野大会に人名が出ています。いずれもポスターのデザインを依頼されたデザイナー（亀倉雄策）と画家（絹谷幸二）で

すが、絹谷氏の競技別公式ポスターにはスキーやスケート他の競技団体からクレームがつきました。争点は「再現と表現」でした。

選手ではない我々がスポーツと親しんだり、観る側として接するというのであれば、「Number」のような雑誌の役割は大きいと思います。私は創刊からよく読んで見えていました。これはアメリカの「Sports Illustrated」というスポーツ雑誌に似ているようですが、そういえば昔はいろいろな種目のスポーツを写真やイラストで多角的に構成し編集していたはずで、確かシンクロナイズド・スイミング選手時代の本間先生も掲載されていました。しかし最近では表紙もサッカーや野球、F1などに偏っているように思いますね。このような雑誌ではスポーツと芸術がかなり密接な関係にあるように思います。

②のところに「作品制作における主題（テーマ）あるいはモチーフとしてのスポーツの可能性」とあります。これは私が描く側にいますので、その紹介の意味を含んでいる部分です。偶然スポーツを描くことになった訳ですが、そのきっかけを紹介したいと思いません。描くということでは、いろいろ考えなければならぬことがあります。構想から始まり、画面構成やスポーツの場・状況・共感・感動・匿名性・普遍性などのキーワードを辿っていくと、どうやって私が絵を創っていくかということが理解していただけるかと思いますが、この中でも私が一番興味を持っているのは「動きのかたち」という部分です。普通は美術のモデルさんを描くのですが、時に行き詰まってしまうことがあるのです。その打開策として、男女・老若・単・組・固定・ムービング・小道具の使用などで工夫をするのですが、初めてスポーツを描いた年は「動きのある人物像」が欲しくて困っていた時にふと「スポーツ」が思い浮かび、その後のシリーズで描くきっかけとなったのです。と同時に「再現と表現」の関係についての問題も

発生しました。再現すればするほどマイナスイメージが働くこともあり、表現における再現の度合いが当初からの難題です。美術、つまりファイン・アートとイラストレーションとの境目や、芸術写真と記録写真の境目はどこかということは非常に難しい問題です。はっきりした境界線というのではないとは思いますが、何となく感じる場所があり、そこにこだわりと注意をして表現したつもりです。この問題についてはスライドを見ながら一緒に考えてみたいと思います。

それから「一瞬と連続」、つまり「瞬間性と連続性」という問題があります。ある「かたち」を捉えようとクロッキーをしたり、カメラマンなら写真に撮る場合があります。その際どの瞬間を捉えるかという選択の問題があります。このタイミングを掴むには、前後の連続した流れも知らないといけません。花で例えても良いと思いますが、花の絵を描こうと思ったときは「あるかたち」の前後、つまりツボミから枯れるまでの流れを知らないとそのタイミング、いわゆる欲しいかたちの「描き時」を逃してしまいます。ですからスポーツでも、「動きのかたち」を把握しようと思った場合には、動きの流れとしてその前後を見ていないと、良いかたち（フォルム）というものなかなか把握できないのではないかと思います。

また「分割・異形・同時同図・同時異図・異時同図・異時異図」とあります。どういうことかといいますと、例えば画面を分割して制作する、四角以外の形の画面に描く、一つの画面にはある時間を限定する、分割画面を利用して変化する時間を数枚に分けて描く、一つの画面に様々な時間の事象を描く、複数の画面に複数の時間の事象を描くということです。人体でいえば、異なるポーズの組み合わせや同じポーズの連続や移動・左右反転・天地逆転なども時間性や動きの表現のヒントとしてあるわけです。

それから、その他のところに「説明と暗示・限定・匿名性・普遍性」などがあります。ここにさきほどの美術とイラストレーションの境目のヒントがあるように思います。例えば、背番号や名前、あるいはユニフォームのデザインなどを再現すればするほど限定されます。ときにはどのチームの誰というところまで特定されます。これらは美術では果たしてどうなのかという問題がでてきます。一方、商品をアピールする必要のある場合は美術とは全く逆の感覚をもって作品化しなくてはなりません。このようなことを考えながらスポーツの芸術における表現の可能性を考えたいと思います。

その下の「スポーツの美的要素」についてです。スポーツは「遊戯」から発生したといわれていますが、そこには時間性・空間性・強靱性・巧緻性・愉悦性・雅味などの諸要素が内在しています。(勝部篤美『スポーツの美学』より)

右側のページに移りますが、ここでもクルト・マイネルの著した『動きの感性学』から抜粋してあります。そのなかで「美の体験成立の条件として、すばらしい体をもって行動する人の美しい動きだとか、芸術的感性を持った観照者が必要である」と述べていますが、そこに私はたいへん深いものを感じます。

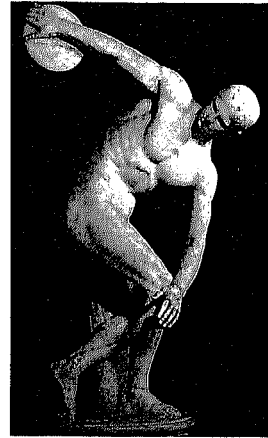
本学のキャンパスで芸術と体育が隣あっていることに私は非常に意味があると思っています。芸術もスポーツも、ある部分では「表現する」ということで共通するところがあるのではないかと思います。ただし、スポーツの「表現性」を描こうとすると「表現の二重写し」ということになります。それではまずいので、どこをどのように捉えて、エキスを表現に繋げていかなければならないかということがまた大きな問題になると思います。いづれにしても私はやはり「表現」の方に興味があります。

以上、スライドを見る前の予備知識として

お話ししました。

それでは、早速スライドをお願いします。

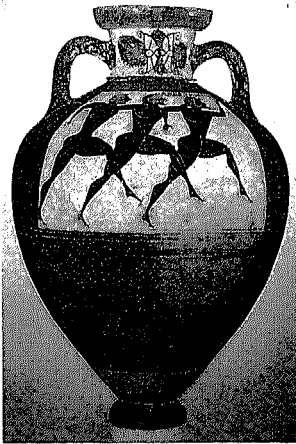
【スライド①】



これは最初に紹介した『ミュロンの円盤投げ』です。この石膏像が芸術の大石膏室にあります非常にリアルです。筋肉の量感やねじめるような全身の動きが力強く再現されている印象ですが、再現しつつ表現しているのではないかと思います。表現という要素にはデフォルメなどがありますが、何かを表現するための「強調」が行われます。しかし実際、外国人を見ると骨格も大きく、筋肉も隆々としていますので、あまり見ないで「あっ、強調している」と思っても、それは誤りであることが多いのです。美術でデッサンする石膏像の体型は初め「ウソだろう」と思っていたのですが、実際見ると「ああ、あれは本当だ」と思い直したものです。それほど外国人との体格の人種差・民族差があるようですが、それでもこの像は理屈抜きに美しいと思います。

【スライド②】

ここから数点はギリシャの壺に描かれた絵を見ていただきます。スポーツは昔、神々を崇め奉る祭りにも使われていましたので、神話的なテーマとともに題材として描かれました。これは紀元前8～9世紀ごろに描かれたといわれています。様式的には「黒絵(黒像式)」といい、釉薬のかかった表面を削ってか



たちを描き出しています。ですから非常に細かいところまで表現できるのです。これはパナテナイア祭用アンフォラ（貯蔵壺）です。

【スライド③】



これは「赤絵（赤像）式」という様式で、黒絵式とは逆に人物のところは塗り残したり削ります。これは『戦士訣別図』です。「黒絵式」と「赤絵式」の二つの様式を理解して、違いを感じてください。

【スライド④】

古代オリンピックはゼウス信仰に基づく祭典競技です。その中でおこなわれたスポーツの絵です。走る競技は長距離走・中距離走・短距離走の3種目がありました。これは長距離走です。専門家はこの走り方で種目も分かるようです。ギリシャ絵画は殆ど残っていま



せんで、壺絵でその面影を辿ることになります。ここでも、筋肉の線や骨格を表す細い線は削り取ったものです。赤絵式に比べると非常にシャープに表情が捉えられているとこが大きな違いです。（反転して映写）

【スライド⑤】



これは短距離走です。腿を高く上げて走っていることがわかります。この絵では、全ての選手の左脚が前に出ている。削った線のおかげでシャープな印象をあたえています。陶器に描かれた古代スポーツの種類はまだ他にもあります。

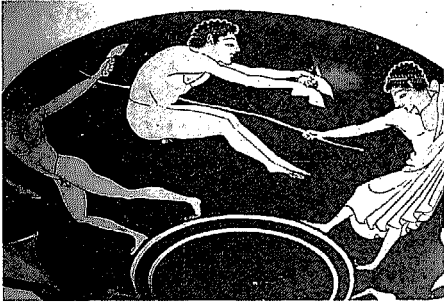
【スライド⑥】



これは泳ぐ人です。水中なのか、下の方に魚がいます。それで暗示しているのかも知れません。これは「赤絵式」です。日本画では、

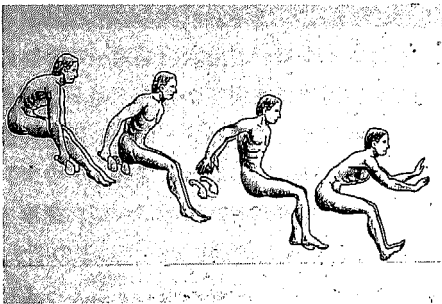
筆の毛一本で描くこともあるので、多少疑問に感じますが、壺絵の場合は削った線による「黒絵式」のほうがより細かな表情が描けるようですが、表情の硬軟の印象がだいぶ異なります。

【スライド⑦】



これは走り幅跳びです。手に持っているのは「ハルテーレス」という跳躍用おもりで、持ちながら助走して跳びました。1.5〜4.5キログラム程の重さだそうです。

【スライド⑧】



このことについて調べていたらこのような図がありました。これで反動をつけて跳んでいるということが理解できました。実験してみると、おもりの効果はあるそうです。

【スライド⑨】



これはボクシングです。手にはグローブの代わりに柔らかい皮紐を巻き付けて戦っています。当時のルールでは相手がギブ・アップするまで殴り合いが続いたそうです。他にも「パンクラチオン」という競技があり、えぐる事、噛みつく事以外は、首を締める、関節をはずす、指を折るなど何でもオーケーという大変過激な格闘技もあったそうです。

【スライド⑩】



時代は飛びますが、20世紀の初頭に移りたいと思います。ここでは「未来派」というイタリアで興った美術運動を紹介します。これはボッチョーニが描いた『サッカー選手のダイナミズム』(1913年 193.2×201cm)という絵です。人物の曲線的な要素に人工的な直線的な要素を絡め、光線を斜めの線として取り入れるというような作品が多く生まれました。

「未来派」は詩人のマリネッティーが、機械とスピードの美学が、現代文明を賛美する文化イデオロギーにとっての絶対的な原理であるとして、「われわれは危険なるものへの愛を歌うであろう。エネルギーの習慣を、大胆さを歌いあげよう…。われわれは、この世の輝きが速度の美という新しい美によっていっそう豊かなものとなったことを宣言する。爆発する息を吐き出す蛇のような太い管で飾られた競走用自動車…機関銃のように素早いあの咆哮する自動車は『サモトラケのニケ』の像

よりも美しい」と「未来派宣言」を『フィガロ』紙に掲載しました(1909年)。当時の若手芸術家や詩人などが非常に影響を受け、特にイタリアを中心に広まったものです。絵では、「一枚の絵=一つのかたち」というものから多視点的な表現に変わり、原色の鮮やかな色使いも相まった躍動感のある画面が特徴です。

【スライド⑩】



これはセヴェリーニ (1883~1966) の『踊り子のダイナミズム』(1912年 61×46cm) です。新印象主義の点描とキュビズムの分割の技法を融合させて表現しています。この時代のキーワードに「ダイナミズム」があり、画題にもよく使用されました。

【スライド⑪】



これはフランス人のグレース (1881~1953)

の『フットボール選手たち』(1912~13年 226×182.8cm) という題名の絵ですが、フットボールといっても、アメリカン・フットボール、サッカー、ラグビーなどさまざまです。ボールを抱えていることからラグビーのようです。しかしアメ・フトが1869年に考案されたそうですから確認の必要があります。当のラグビーは1823年に始まったとされています。さて、この作品の制作年代は未来派運動の初期となります。このように形をずらしたり分解する制作方法がよくわかる作品です。

【スライド⑫】



これはジャコモ・バッラ (1871~1958) の作品です。何に見えますか。モチーフは鳥です。画題は『アマツバメ・動線と動きの回復』(1913年 96.8×120cm) です。アマツバメが左から右に飛んでいるのですが、速度を表現しようと形を連続的に描いているのです。画面の波線が大きな動きの流れをつくっています。

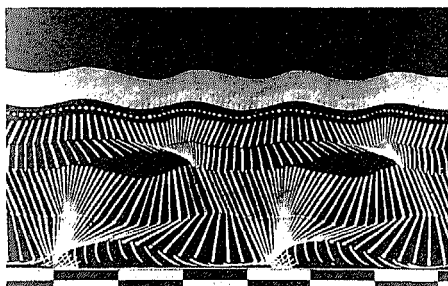
【スライド⑬】



これもジャコモ・バッラの作品です。これは分解写真をそのまま利用して描いたような作品です。何本も脚を描くことによって動き

を表していますが、漫画で見られる表現と通じるものを感じませんか。上のフォルムはなんでしょう。散歩をさせる人かもしれません。地面にはなにも描かないで、直線だけで移動する空間を表現しているのです。画題は『鎖につながれた犬のダイナミズム』(1912年 89.9×109.9cm) です。

【スライド⑮】



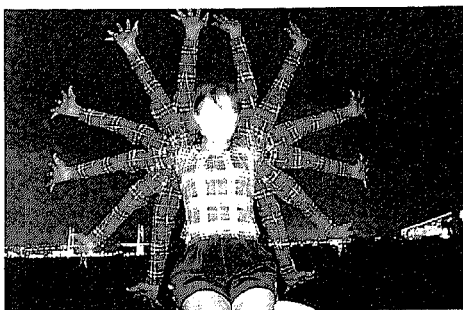
これは写真が美術にどのような影響を与えたかを示すものです。ここに紹介するマレー(1830~1905)という人は生理学者ですが、写真の研究にも力を入れました。これは黒い衣装を着た人間の側面にマーキングをし、左から右へ歩くところを連続写真で撮影したものです。

【スライド⑯】



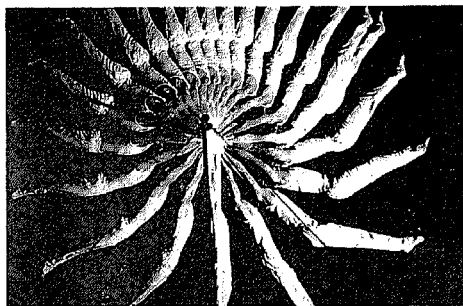
これはそのための白線のついた黒服を着た人の写真です(1883)。時代的には未来派よりも早いので、未来派が影響を受けたと考えられます。

【スライド⑰】



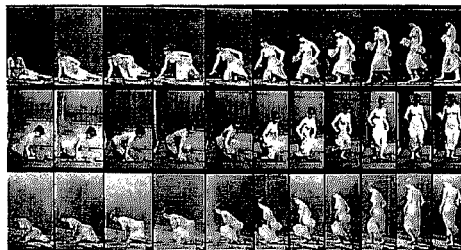
現代ではどうかといいますと、「マルチストロボ」を使用して撮影するとまるで千手観音のような写真になります。分解された姿を一枚に写し込むと、ある種のリズムや動感が生まれるようです。

【スライド⑱】



スポーツとなると、例えばこのような体操競技の鉄棒に見られる大車輪があります。このようなマルチストロボを使用した分解写真は競技選手の技術研究にも利用されますが、さきほどの『アマツバメ——』の作品の動きの表現もより理解されるかと思います。

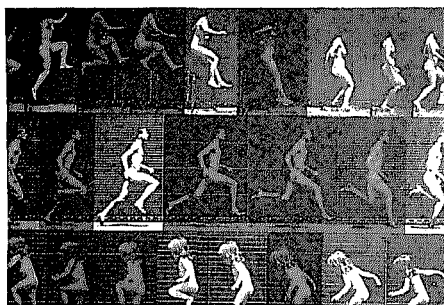
【スライド⑲】



写真の世界では、イギリス人のエドワード・マイブリッジを取り上げます。彼は『ザ・ヒューマン・フィギュア・イン・モーション』

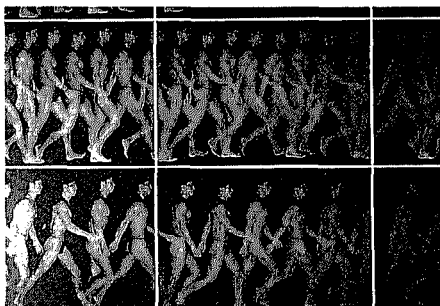
と『アニマルズ・イン・モーション』という写真集を出版したのですが、男・女・子供・老人や動物などの「動き」をフィルムに収めました。動物では馬が有名ですが、猫・牛・ラクダ・象・ロバ・トラなどの他にも、鳥ではハトやダチョウなどをモチーフにして、「クロマトグラフ」と呼ばれる方法で連続写真を撮影しました。このスライドでもわかるように、同じポーズを前・後ろ・横などからレールに載せたカメラを移動しながら撮影しています。「キネトスコープ」の発明(1889年)をしたエジソンよりも前にこのような「動き」の研究を行ったということで、モーション・フォトグラファーとして知られる写真家です。

【スライド⑳】



これはその『ザ・ヒューマン・フィギュア・イン・モーション』の表紙です。美術や写真を学ぶ者のなかでは有名な写真集です。イギリス人の画家フランシス・ベーコン(1909～1992)も影響を受け、彼との交流の中からいろいろな作品を描いたことは有名です。

【スライド㉑】



これは篠山紀信の作品の一部です。彼もマルチストロボで歩く姿の連続写真を撮って

ます。この写真集には他にもさまざまな「動き」が掲載されていました。

【スライド㉒】



もう一点マルチストロボ使用の写真を紹介します。飛び下りる連続写真ですが、作品としてみるとこれまでの数点とは雰囲気が大きく異なります。光の方向や量が人体の動きのフォルムを美しく浮かび上がらせています。

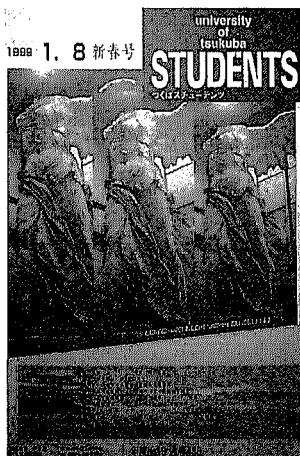
【スライド㉓】



これは先程の「未来派宣言」に出てきた『サモトラケのニケ』です。ある靴のメーカーが社名に使っていますが、「勝利の女神」として知られています。この像の高さは2.45メートルぐらいあるのですが、実物は大理石製でルーブル美術館にあります。芸術の大石膏室にも石膏像がありますので是非ご覧ください。

そのメーカー（ナイキ=ニケ）はデザイン・ポリシーとして「もっと速く走りたい・より高く跳びたい・華麗に見せたい」を掲げていますが、このようなものからイメージを作ったのかもしれませんが。

【スライド⑳】



これは学内広報誌の「Students」の表紙です。私は学生担当教室で1年間表紙を担当していましたが、新春に相応しい躍動感のある表紙を作ろうと、大石膏室のニケ像を連続写真風にレイアウトしたものです。下は大洗の海を事務の方が撮影してきたので、それも使いましょう、と組み合わせました。後日知ったのですが、このニケ像は軍艦の舳先に降り立った瞬間を表したのだそうです。私は羽化した両手で飛び立つ瞬間かと思っていましたので意外でした。いずれにせよ、偶然とはいえ海の写真と結びついてホッとしました。

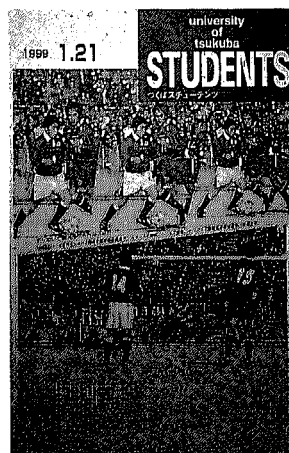
【スライド㉑】



この次に紹介する「Students」の表紙の仕

掛けからお見せします。これは一昨年のサッカーの天皇杯です。本学の蹴球部が勝ち進んで、Jリーグの鹿島アントラーズと戦うことになりましたので私も応援に行きました。表紙を飾る写真は私の写真以外にも様々な方から協力をいただいていた。これは学内の写真店の方が蹴球部のために撮影した写真ですが、この写真では筑波の渡辺選手がドリブルで突破するように見えますので「ドリブルで突破する渡辺選手」と見出しをつけましたが、左端の相馬選手が気になりますね…。

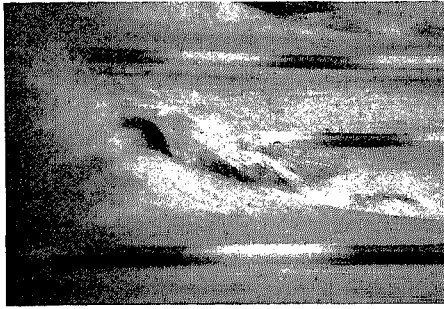
【スライド㉒】



この写真の大きさを僅かずつ変えて、先程のニケと同様に3枚をつなげました。するとさらに突破するように見えるのですが、この場面の連続写真を見ると、このあと渡辺選手は「これぞプロの洗礼」とばかりに相馬選手に首のあたりを掴まれて倒されていました。ですから「突破した」とは書けなかったんですね。でも勢いのある写真で表紙が活き活きしたのではないかと…手前味噌ですか。

【スライド㉓】

本題に戻りますが、動きをあらわす表現方法の一つである「ブレ」を紹介します。これはシャッター速度が15分の1で撮影された水泳の写真です。写真のブレは動感表現としてよく使われる手法ですが、絵画にも応用されることがあり、輪郭線の解釈と表現によ



って動きを表している作品もあります。

【スライド⑳】



これは未来派のカルロ・カッラ(1881~1966)の作品です。泳ぐ人を描いていますが、写真とは異なる解釈の工夫が見られます。画題は『泳ぐ人たち』(1910年 105.3×155.6cm)です。

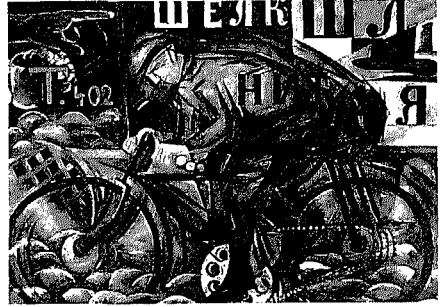
【スライド㉑】



自転車を描いた作品を3点紹介します。これはアメリカ人のライオネル・ファイニンガー(1871~1956)の作品です。画題は『自転車競争』(1912年 80.3×100.3cm)です。キュビスムの影響からタイヤ以外は人までも直線的に描かれています。

【スライド㉒】

これはロシアの女性画家のナタリア・ゴン



チャロヴァ(1883~1962)の『自転車に乗る人』(1913年 78×105cm)という作品です。ここにも「ずらす」という手法が見られ、この作品では控えめにイタリア未来派の刺激を受けた「レイヨニスム(光輝主義)」と呼ばれる抽象的表現をしています。

【スライド㉓】



これはボッチョーニの『自転車に乗る人のダイナミズム』(1913年 70×95cm)です。自転車に乗る人とともに、取り巻く空気までもが分解され大胆に再構成されています。

【スライド㉔】



未来派の彫刻作品を紹介します。これはボッチョーニの『空間の中の連続した単一の形態』(1913年 119.7×86.4×82.2cm)です。彼は絵画のみならず彫刻にも連続運動を求めて行ったということです。抽象的な形としての動きというよりは、逆に動きから出る表情を追ったように思います。何となく崩れていたり、なびいているような表現がありますが、ある意味では具象的にも感じます。

【スライド⑳】



さきにドガの踊り子の話をしましたが、日本でもこのような作品もあります。これは、堀進二(1890~1978)の『舞踏』です。高さは160.5cmあり、ブロンズ像です。

【スライド㉑】



時代をさかのぼると、飛鳥時代の造形物に

このようなものがあります。「舞い」の姿でしょうか、非常に穏やかで静かな動きの表現といえるでしょう。

【スライド㉒】



再び現代にもどりますが、これは石井鶴三のブロンズ彫刻です。『若乃花・横綱土俵入り』(1962年 高さ55cm)という先代の若乃花のリアルな像ですが、これは当時、年間の最優秀力士に彫刻作品を贈る制度があり、そのために制作したものです。

【スライド㉓】



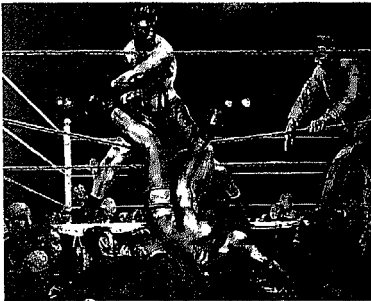
これも石井鶴三のブロンズ彫刻です。『上手投げ決まる』という作品名ですが、横綱審議委員会委員をつとめる程でしたから、このような「技」にも非常に興味を持って見ていたと思われる。

【スライド㉔, ㉕】

石井鶴三は水彩画も描きました。2点紹介します。



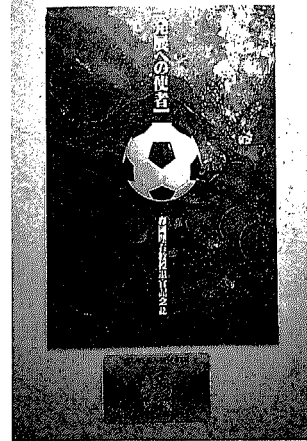
【スライド③⑨】



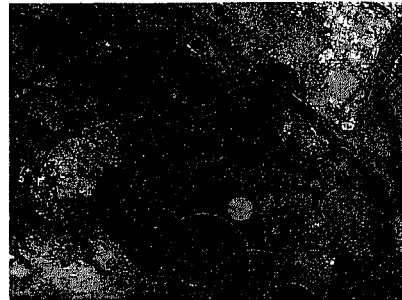
これは挿絵画家としても活躍したアメリカのジョージ・ベロズ (1882~1925) のリトグラフです。このボクシングの絵には記録性が求められていたようです。そうすると写真同様の事実を残さなければなりませんので、再現性をおろそかにして表現に偏ってはいけないわけです。これはヘビー級のタイトルマッチの試合を描いたものですが、むしろ写真では捉えきれない、観客やレフェリーの顔までも同時に描いているようです。ある意味では一枚の写真より記録性があるとも言えるでしょう。

【スライド④⑩】

これは「勝ち色」にこだわったデザインの例です。下の方にあるのが蹴球部の依頼で制作したものです。中央の校章の「五三の桐」を挟むように、サッカーボールの五角形を組み合わせました。それから上のものは、体育科学系の森岡理右先生の退官記念誌の表紙に私の日本画作品を使っていたものです。ちなみに白黒のボールはデザインの先生が加えたものです。



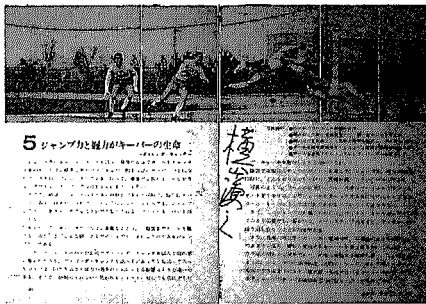
【スライド④】



その私の作品を見ていただきます。これは『カミと守れ』(1996年 181.8×227.3cm) という作品です。秋の公募展への2点の出品作品のうち、1点は母子像を描いていたのですが、もう1点がどうしても決まらないのです。ぼんやりと「動きのある人物画」ということは決まっていました。ふと、数日前にアトランタ・オリンピックでサッカーの日本代表がブラジルに1対0で勝った試合を観ていたことを思い出しました。そこで「動きのある人物画」としてサッカーの絵を描こうということになりました。サッカーは私もゴール・キーパー(以下GK)として経験のあるスポーツでしたから、「守護神」といわれるGKを主役にした絵を描くことに決めました。さっそく、テレビでは分からない部分を筑波の蹴球部の練習を観てスケッチしようとグラウンドに行きました。余談ですがグラウンド脇でスケッチをしていましたので、スパイに思われたかどう

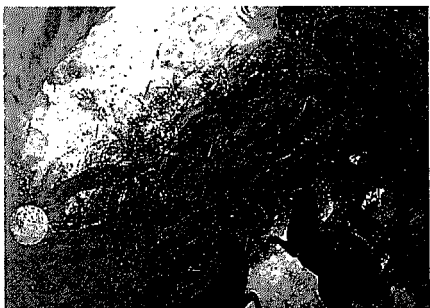
か分かりませんが、監督が近づいてきましたので、思わず「お邪魔しています」と挨拶をして誤解を解いていただきました。この作品でも「再現と表現」の難題に苦心しました。公募展では気に入っていた母子像ではなく、こちらが入選しました。GKの「神の声」のさらに後ろにある「カミ」を描こうとおもって描いたものです。

【スライド④】



蹴球部の先生方との御縁から、森岡先生の退官記念パーティーに、記念誌の表紙を担当したということで招かれました。その時、これは31年前の本ですが、著者の岡野俊一郎氏と、このページの模範演技をしていた横山謙三氏を御紹介いただき、サインをしていただきました。横山氏はメキシコ・オリンピックで日本が銅メダルを獲得した当時、小学生だった私の憧れのGKで、ファンレターでサインをお願いしてもいただけなかったものが、サッカーではなく日本画を描いていたことで29年後にいただいたという不思議なエピソードです。

【スライド⑤】



私は暫く『カミと守れ』を連作しましたが、

その中からもう1点。ご覧のようにGKのセービング姿です。この時もグラウンドまでスケッチに行きましたが、さきほどもお話したように、動きの流れ、その「かたち」の前後がわからないとポーズも絞り込めないのです。GK練習やシュート練習を観ていると、繰り返して現れる「かたち」が見えてきますので、制作の必要に迫られるとグラウンドに行っていました。(1997年 181.8×227.3cm)

【スライド⑥】



もう1点私の絵を紹介したいと思います。これは現在続けている【Motion】というシリーズの作品です。昨年の6月に本学で6大学陸上競技大会がありました。基本的な運動のフォームに興味がありましたので観戦にいきました。その時の選手の走る姿や走り幅跳びの「動き」が魅力的で、それで何かを表現できないかと思い、連続運動として画面に残そうと描いたものです。画題は『Motion—連続とも不連続とも—』(1999年 182.0×354.5cm)です。

【スライド⑦】



また作家の作品に戻ります。これはアンリ・ルソー（1844～1910）の『フットボールをする人々』（1908年 100.5×80.5cm）です。プリミティブな表現で知られているルソーですが、ここでも独創的でユーモラスな表情があります。当時のユニフォームもわかります。

【スライド④⑥】



次はある意味で、私にとって最も大事な画家になりますが、ロシア生まれのニコラ・ド・スタールの『パルク・デ・フランスの一夜』（1952年 200×350cm）です。私はアトランタ・オリンピックのサッカーの試合がきっかけで作品を描いたとお話しましたが、この画家を調べていくうちに、彼がフランス対スウェーデンのサッカーのナイト・ゲームを観てからこの作品を描いたことがわかりました。「うわー、同じことをする人がいたんだ」と思いました。この作品は鮮やかな色面で構成されています。ド・スタールはグラウンドの中を走り回るユニフォームを着た選手たちの動きに興味を持ち、スペクタクルとパターンに魅せられ、「天と地の間に、赤や青の草の上を1トンものかたまりがすっかり我を忘れ、一団となって走り回るさまは、とても本当とは思えない。なんといい喜び…」と手紙にも書き記しています。この場合は単なる再現ではなく、強い「表現」を含んだ「再現」と言えるかもしれません。

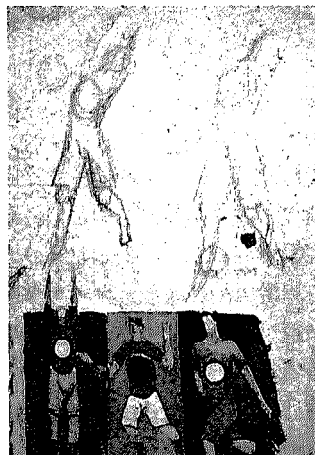
【スライド⑦】

これはロベール・ドローネー（1885～1941）の作品です。『フットボール』（1916年 24.5×20cm）と題されています。画面には文字も構成要素の一つとして描かれています。未来派



に影響を受けましたが、立体派と融合した「オルフィスム」をうちたてました。色彩は野獣派のように強烈です。

【スライド⑧】



そのドローネーの素描的な作品です。画題は『フットボール』（1918年頃 31×29cm）です。このような作品から構想がまとめられて制作へと展開することもあります。

【スライド⑨】

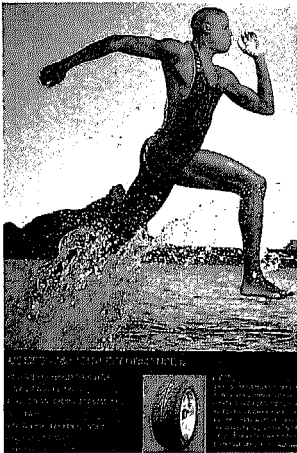
これはマックス・ベックマン（1884～1950）というドイツ人画家の作品です。『ラグビーをする人々』（1929）という画題で、大きさは縦213cm、横100cmあります。力強い筆致で、より構成的なものに強い希望や憧れを持って創作した象形的表現主義の代表的画家です。



【スライド⑥0】



【スライド⑥2】



スポーツがポスターなどに使われている例をいくつか紹介します。これはタイヤメーカーの雑誌広告です。「雨天時の速くて安定した走り」のイメージなのでしょう。

【スライド⑥1】

これもタイヤメーカーです。同じようなイメージ表現です。もう1点紹介しますが、自動車関連メーカーの広告には「走るシーン」が目立ちます。



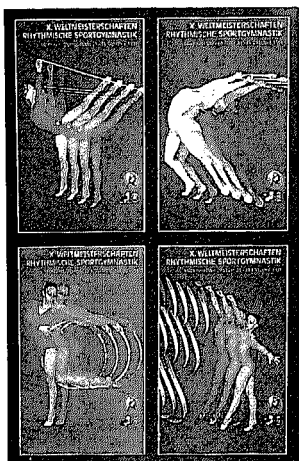
日本の自動車メーカーの雑誌広告です。このような広告では製品のためのコピーも含めてのデザインやレイアウトがなされます。

【スライド⑥3】



これは住宅メーカーの広告です。飛び込みのフォルムとの組み合わせです。

【スライド⑥4】



次いで、これは新体操の世界選手権のポスターです。なお、ポスターは4種目それぞれ独立して作られています。写真による同一フォームの「ズレ」を利用した例です。

【スライド⑥5】



これはサッカーの国際試合のポスターです。写真を基に描いているようですが、先程の「再現」の問題ではユニフォームや文字のたぐいを描いていけばいくほど選手が特定されます。見る人に特定のイメージを与えるのか、あるいは普遍的な部分で訴えるのかが分かれ目となります。

【スライド⑥6】

同じくサッカー関連ですが、こちらの方がかたちを崩しつつ強いイメージを与えようと



しています。

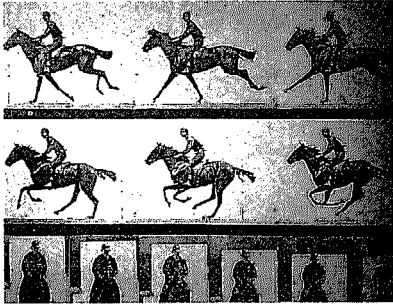
【スライド⑥7】



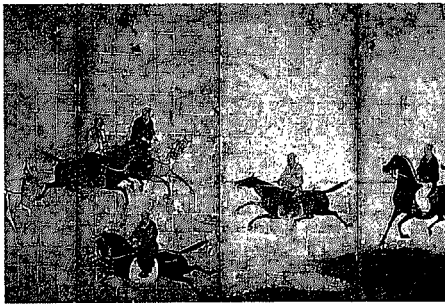
画家ならではの表現の工夫について紹介します。これはフランス人のロマン主義の画家テオドール・ジェリコー (1791~1824) の「エブソンの競馬」(1821)という作品です。次に紹介するマイブリッジの写真との比較になりますが、このように馬の前脚と後脚の動きの組み合わせで、このようになるかたちは実際には起こりえないのですが、我々に動感とか躍動感を感じさせ、何よりも走っているように見せてくれています。なおジェリコーは馬好きな画家でしたが、落馬で命を落としているのが何とも皮肉です。

【スライド⑥8】

これはマイブリッジが撮影したの馬の連続写真です。脚の動きはご覧のようになっています。画家の工夫がおわかりいただけると思います。(反転して映写)



【スライド⑤9】



同じ例が日本にもあります。これは17世紀に描かれた、京都醍醐寺にある『調馬図』（17世紀前半 重要文化財）ですが、左下の黒い馬に注目してください。前脚と後脚の組み合わせに工夫が見られます。カメラが写し出したという「事実」と違っていても、写真が発明される以前に、動きを感じる感覚や表現の工夫が洋の東西を問わずにあったことに驚きます。そのようなことは、人間を描く際も同様です。皆さんがもし表現することがある場合には、どこをどうしたら訴えたいことが伝わるかということを考えていただきたいと思います。また、鑑賞する際には、その工夫を

見抜く楽しみを持ってはどうでしょうか。

さて「芸術とオリンピック」について触れる時間がなくなってきましたので一つだけ、かつて芸術が「競技部門」として存在したことを知っていただきたいと思います。芸術競技は1912年のストックホルム大会から1948年のロンドン大会までの間の7大会で開催されましたが、ベルリン大会の絵画部門では日本画家の藤田隆治（1907～1965）が『アイスホッケー』という作品で銅メダルを獲得しています。しかし参加者のプロとアマの同時参加の問題や、作品の移動・保管、そして現在の体操競技などでも話題となる審判員の公正判定の問題などがあり、競技としてはなくなりました。現在は競技ではなく「芸術展示」として参加するイベントになっているようです。今年のシドニー大会にむけてのIOCの文化プログラムに芸術があり、芸術の日本画の学生も応募して国内審査を経て国際審査までいきました。マスコミではなかなか紹介されませんが、オリンピックと芸術にはそのような関係があります。

最後は時間切れで、まだまだ紹介し残した部分もありますので、かなり心残りですが、これで終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

（本稿は当日の授業の記録を基に、一部補足・修正を加えました）